

# 「がんゲノム医療の未来と課題」



2017年1月25日(水) 18:00-19:30

金沢医科大学 医学教育棟4階 E41 講義室

東京大学大学院医学系研究科 ゲノム医学講座

特任助教 高阪 真路 先生

がん分子標的治療においてバイオマーカーにより適応の可否を決定するプレジジョンメディシン(個別化医療)の時代が到来している。臨床検体の量が限られていることや時間・費用の面から、治療標的になりうる遺伝子異常を一度に複数検出するマルチプレックス診断薬開発が望まれており、次世代シーケンサーを用いたクリニカルシーケンスが注目されている。本講演では国内外でのクリニカルシーケンスの取り組みを紹介し、臨床応用する上で我々に求められる課題について検討し、がんゲノム医療の未来について考察する。

参考文献：A recurrent neomorphic mutation in MYOD1 defines a clinically aggressive subset of embryonal rhabdomyosarcoma associated with PI3K-AKT pathway mutations.

Kohsaka et al., Nature Genetics 2014

